

石の仏に見る隠された顔

石の仏に見る隠された顔

——見立てという視点から考える——

(石仏のイコノロジー⑪)

★石仏をめぐって

石仏研究が筆者の本来のテーマではなかった、天龍水系の霜月神楽(花祭、遠山祭)の祭祀のなかで展開される神話的構造から祭の世界観を考えるのが研究テーマであった。この問題を進めていく過程で周辺の石仏を調査し、祭と地域の関係を探ろうとしたことから石仏に興味を持ち、調べ始めたのであった。言うならば副産物であった。そのことは「石仏幻想の道」で触れたが、この地域には子供を抱く「子安観音」が多いことが興味をひいた。ところで、石仏と一言でいっても幅が広い。石仏は各地域の教育委員会などで出版されている地域誌、民俗誌などには「石造文化財」の項目に組み込まれ、細かく分類されている。そこでは観音、山の神、地の神、水の神など文字だけのものも、組み込まれている。しかし、「地蔵」一つにしても座像か、立像かは、資料の分類表では判らない。また地蔵が合掌しているのか、宝珠を持っているのか(片手か、諸手でか)、錫杖を持っているのかなども判らないことがある。写真が付いていれば良いのだが、石像の写真がすべて載せられてはいない。分類表にそこまで要求するべきではないのかも知れないが、石像が一つの石に一体だけ彫られているのか、複数体で彫られているのか、などの情報が必要になる。これは石工の

技術などの情報とも関わり、とても大事なものだと考えている。つまり基本的に石工は余所からの出稼ぎで来ていることが多く、その周辺の地域との交流を考える手がかりになるからである。また、様々な理由で移設された石仏もあるが元々の場所は、それなりに道路標識などの意味を有していたのである。

★子安地蔵を考える

筆者は、子安観音、子抱地蔵(ここでは子抱地蔵と表記する、子安観音と混同しないためである)、馬頭観音、に注目しているが、資料だけでは分からず、実際に現地で、気付かされるが多々ある。とくに胸元に宝珠を持つ地蔵(図①②)は、子供を抱く姿かと見える。この様式は図③④の地蔵とは、宝珠の大きさなどから異なる。注意してみると、図①②では宝珠を包む産着状の布が十字架に見えることに注目しておきたい。これは子供を抱く地蔵尊であるという

春日井 眞 英



図=② 名古屋市昭和区宝珠を抱く地蔵



図=① 足助・地蔵堂付近・宝珠を抱く地蔵



図=③ 小牧山の地藏
左のものは文化6 (180
6) 年 右は天明元 (17
81) 年

前提状態で見れば仏教的な子供の守護者という思い込み(コストマ)を作りだしてしまう。だが、産着状の布が十字架を形成していることは見逃されている。宝珠を子供の頭に見立て、

産着で十字架に見立てるという技術を用いることによって地藏＝仏教の子供の守護者というコストマ(思い込み)に挑戦しているのである。そのことは信仰者の眼には、地藏を通して異なる視界が広がったことを意味しよう。それは、禁止の弾圧からの抜け道でもあった。地藏尊として受容されることは社会的に仏教的なモノというお墨付きを得ることもある。だが、幼子



図=④ 八事墓地の地藏

イエスを抱くシメオンの話(『ルカによる福音書』)を聞いたことのある者にとっては、この地藏は二重写しになって幼子イエスとシメオンに見立てられることになる。この種の石仏が

彫られた頃、福音書がどの程度受容されていたかを知ることができないが、産着が、十字架を形成している意図が理解されていたことは否定できないであろう。地藏は、一般的に僧形で彫られ、六道をめぐりながら、人々の苦難を救い、苦しむ人の身代わりとなる菩薩とされる。とくに子供の守護尊とされ、「子安地藏」と呼ばれる子供を抱く地藏菩薩もあり、また小僧姿も多いとされている。基本的には死後の世界での救済者になるが、キリスト教的立場では現世での「救世主の誕生」に通じ、救済を予祝することになる。つまり現世での救済に希望が込められていたとれる。シメオンの話を理解するためにイエスの

石の仏に見る隠された顔

誕生後のことを『ルカによる福音書』(第二章)から引用しておきたい。

さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。そこでそれは主の律法に、「初めて生れる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。02:24

また、主の律法に言われているとおり、山鳩一つがい、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。02:25そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。02:26そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とお告げを聖霊から受けていた。02:27シメオンが「霊」に導かれて神殿の境内に入ってきたとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。02:28シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。02:29「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。02:30わたしはこの目であなただの救いを見たからです。02:31これは万民のために整えてくださった救いで、02:32異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。02:33父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。02:34シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上らせたりするために定められ、また、反対を受けるしとして定められています。02:35——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人の心にある思いがあらわにされるからです。(日本聖書協会)

地藏には、左手に宝珠、右手に錫杖を持ち、左足を下げ石に腰かけたものや立像のものがある。図①④は地藏である。だが同じよう

石の仏に見る隠された顔

に宝珠を持つ図Ⅱ①②の地蔵は、図Ⅱ③、④とは異質だと考えている。それは宝珠が小さく、また手の組み方が直線的で、胸前に来ていないため、十字架のように見える。さらに図Ⅱ①と②では両手で抱く宝珠と、それを載せている布は産着にくるまれた子供に見立てることができ、子供の守護尊としての地蔵と言える。しかし、これに『ルカによる福音書』を重ねると、日本文化のお宮参りの話に、子安地蔵とシメオンの姿を重ねることが可能となる。

服部幸雄（千葉大学名誉教授・日本文化史・芸能研究家）は、見立てという視点について

見立ては、その文字が示すとおり眼で「見る」こと、視覚的な分野における一表現技巧である。それは、いったんは眼を通して感覚的に受け取られたものを、いちど頭脳の知的な働きへと誘い込み、ふたたび感覚の世界へと突き返すという、屈折した鑑賞法を要求してくる。……「見立てられる」本歌的な存在が周知である場合には、右の屈折は瞬間的に行われる。そして、眼前にある「見立て」の形を等して、その奥に「見立てられた」ものの形が二重写しのようになってほの見えることになる。

と指摘する。これは、仏教の地蔵が本歌であり、それがキリスト教的な要素を誘い込みながら、幼子のイエスを抱くシメオンが、子供を抱く地蔵に見立てられることになるのであるが、問題は福音書のシメオンがどの程度受容されていたかである。そこが、この見立ての可否に繋がってくる。つまり「見立てるもの」と「見立てられるもの」が二重写しになっていることだと服部幸雄は言っている。さらに近世文学研究者の中村幸彦は

見立ての微妙は、一見似ていない或は似ていないと、一般普通には思われる物、あるいは点について、類似を発見することにかかっている。その類似は作者の尖鋭な精神、俊抜な観察が発見するものであり、それにふさわしい洗練された表現がともなわなければ

ならない。出来上がった見立てにつけば、その類似点を巧みに押さえて、二者の連絡を確かに保ちさえすれば、その点を除いた他の部分は、できるだけ相違していた方が面白いと言うことになる。

と、言う。そして日本美術史の鈴木廣之は上記二点に加えて三つ目の要点があると、ほぼ見立ての骨格が押さえられるという。それは「見立てるもの」と「見立てられるもの」が聖俗の関係にあることだと言う。その例として「江戸初期の遊女歌舞伎において、……スターの遊女を禅宗の和尚に見立て」、「若衆歌舞伎において主役を勤める美少年達を 仏像に見立てて誉める習慣」があったと言い、これを「当代の「俗」を「聖」に「見立てる」ことだと言う。しかし、このことは「必ずしも「聖」そのものの権威の失墜や墮落」を意味しない。むしろ聖に見立て見立てが姿のままに俗を我が物にしようとする、したたかなエネルギーをもつのが江戸の見立てであって、広くこれらの「見立て」の底に流れていたのは、俳諧の「精神」だったと指摘し「見立て」には、「俳諧」と同じように「滑稽」「戯れ」「機知」「諧謔」等の意味が隠されていることにもなるという。そして、鈴木は服部幸雄の説を纏める形で岡見正雄（国文学）の

ここには江戸時代人ならではの宗教観があり、それ以前の中世の人々の日常のすみずみにまではいりこんだ、宗教や信仰に対する感覚から遠くへだたっている。ここにあげた要件のすべては江戸なればこそ満たされる。見立てがすぐれて「見立て」でありつづけたのは江戸時代だ。そのもっとも洗練された見立てのかたちが中村幸彦氏の戯作論の中に要約されていた。

と、指摘する。このことは石仏などでも俳諧的精神によれば「滑稽」「戯れ」「機知」「諧謔」（ざれごと）等の視野で見ることを可能とし、キリシタン禁止令ですら一部の人々の視点からは諧謔的に見られていたことになる。しかも時代的に石仏とキリシタンの要素とに関わりがあることは明白である。これまでも筆者は豊川、金像寺の馬頭観

顔面に十字架を見る事例が多いのは事実である。ただ、これが隠れキリシタンの裏付けになるかと問われると、見解が分かれるかも知れない。この種の十字架が施された石仏が存在するのは何も北設楽郡だけではない。不思議なことに、この種の工夫が馬頭観音に多いと言うことは興味深い。このような石仏の表情に、非仏教的な意匠を工夫した石工達の努力と技術に敬意を表すべきであろう。ここには石工達の「機知」があったと見たい。この、顔に十字架を隠す石仏は長野県から愛知にかけて広く分布している。それも伊那街道、あるいは別所街道に沿って多い。しかもこの街道と言っても、山の中を網の目のよう

★ 石仏の顔に見る十字架



図=⑥ 設楽町津具・馬頭観音の顔の十字架

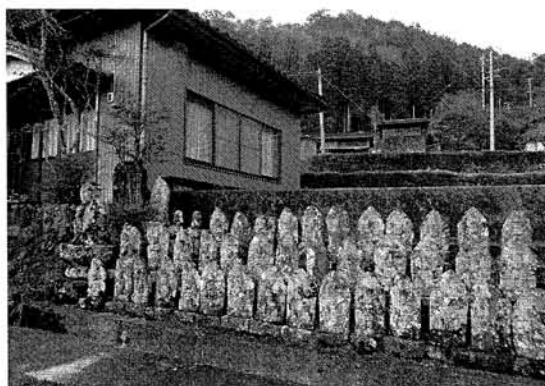
知らないが、石仏の顔に「十字架」を見ることのできる事例は、この図⑥以外にもある。



図=⑤ 豊川市・金像寺・三十三観音中の馬頭観音

音の眼に十字架があることを紹介したが、図⑤のような眼の部分に十字架があることはキリシタンへの「偏見」に対する「戯れ」と「滑稽」さの表現だったのかも知れない。十字架が眼に彫られている例は、この一例しか

に走る幾本かの道筋であり、現代の国道のような一本の道筋に限られるものではなく、複雑に山中を走り、三十キロ程の間隔で馬や人が休める拠点を持った道筋であったと考えている。かつては、野宿もやむを得なかったのかも知れないが、それがいくつかの馬匹輸送のグループの出現から、かれらの拠点となり、馬などの世話をする人が定着して行ったりと考えている。さらに、そのような場所が情報交換の場所となり、初対面の相手が信頼できる存在かを知る目印として、各地区の寺などをつなぐ者もいたと考えている。さらにマリア観音などと呼ばれる子安観音などのような石仏などが祀られることで、目印として機能した可能性もある。この種の石仏は寺の管理下にはなかったようだ。なぜならば、多くの持院で境内外の石仏について「無関係」と説明された。歴史的に、それは体制へのポーズとも考えられる。本来の拠点がどのようなものであったかは分からないが、関



図=⑦A 設楽町平山の三十三観音、その中の一体図=⑦B。他にも十字架が顔に彫られた石仏がある。





図=⑧新城市 永住寺

わりを持つとしなかった集落の存在も視点に置くべきであろう。だから里と里の間をつなぐ拠点が集落付近にでき、それがお堂などへと推移したかも知れない。そして、安定的に馬や人を受け入れる施設へと変化して行くには時間が必要であったと

考える。調査の中で、山の中で立派な構えの寺院と出会って驚くことがあるが、そのような寺院もかつては小さな庵、あるいはお堂のようなものであったかも知れない。少なくとも寺に情報拠点としての性格があったことは、容易に考えることができる。そのことは、『設楽町誌』の中で廃寺となった寺院などの本末関係を見ると、京都はおろか、福井の永平寺、豊川妙厳寺（豊川稲荷）、幡豆横須賀華蔵寺などとの関係をj知ることができる。

つまり石仏の造立の背景として街道沿いの経済的背景と人的交流の問題を考えて行く必要がある。そのことは、設楽町納庫に伊那高遠の石工、守屋貞治の延命地藏像があることなどから伺うこともできる。彼が活躍したのは文政三（1820）年と江戸時代後期だが、すでに鎌倉期から、北設楽郡は吉野や伊勢、諏訪との関わりが指摘されている。



図=⑨豊田市舞木町



図=⑩駒ヶ根桃蔵院 T字型の十字架

そういう意味で武井正弘氏（宗教民俗）が花祭を論じた際に北設楽を宗教的サンクチュアリであったと指摘したのは、この地域が文化的に敏感な地域であったからかも知れない。そのような場所だったからこそ自分たちの信仰、あるいは仲間をつなぐ符牒としての石仏が機能していたのかも知れない。石仏の種類によって、仲間同士の理解を助ける機能があったと考えているが、推測の域を出ていない。そのような中で三十三観音は重要な役割を果たしていたと考えている。いまでは観音像が一カ所に纏められて、その脇に子安観音も祀られているが、かつてはあちこちに散らばっていたと伝えられている。ただ子安観音は西国三十三観音の中には含まれないことに注意すべきである。また板東、秩父、西国観音霊場巡拝記念の碑が多く見られることもできる。

石仏の顔面に十字架を見ることができると指摘したが、その意匠の分布は東三河の新城から山間部にかけて多い。さらに、北は伊那周辺、南はまだ十分確認できていないが豊田市舞木町の地藏（図11⑨）のように、本体に×印の形で十字架を見ることができ。顔面の十字架は大きく彫られていれば理解しやすいが、意識してみなければ判らないこともある。ただ十字架と判断するところでは意見が分かれるところである。また、X字型、T字型の十字架を認めるか否かで判断は分かれるであろう。しかし、石像の顔に十字架を彫ることは石工にとって挑戦であったに違いない



図=⑪A駒ヶ根・桃源院。右は⑪Bは別角度からの顔面

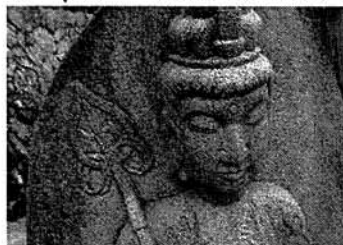


図=⑫設楽町清崎毘沙門堂

ようとする相手の所為にもできる。また、多くの石像に制作年代がないこと、石工の情報が、極めて少ないのは、追求を避ける狙いが有ったからであろう。守屋貞治のように年代が判明するのは稀なことであるが、追及を受ける隙が無かったからであろう。

ところで、顔の十字架の画像から気がついたことがある。それは石仏の鼻梁（垂直軸）に対して眼という水平軸が細く、つまり繊細に彫られているものが年代的に新しいのではないかという点である。つまり、それだけキリシタンに対する弾圧が厳しくなっていたことを意味し、規制を潜りぬける手法として、豊田市舞木に見る地蔵の衣の図柄（図⑪⑨）のように工夫されたと考えている。それは錫杖の形とも関連しよう。初期のものはイエズス会の紋章に準じたH型の仏具であった、と考えている。本来の錫杖では中が三日月型もしくは釣針型になっている。また、錫杖の頭は猪目（ハート）型になっ

石の仏に見る隠された顔



図=⑬A細江・東林寺

錫杖の形・中の形状が三日月状であり、H型のものとは異なる。図=⑬B右は長野県安曇野琴平、右手にあるものはH型であり、左のものもAに比較して直線的であり違いが判る。



い。このような工夫も「滑稽」「戯れ」「機知」「諧謔」といった俳諧的精神であろう。石仏の顔の造作はいかようにも取り繕うことは可能である。石工の腕の未熟さに託けること

ているのが多いが、室生寺の地蔵の持つ錫杖のように三角形図⑭⑬）になっているものもあるが、これはキリスト教の三位一体の象徴とも見れる。室生と言う地理的条件から堺との関連が指摘できるかも知れない。つまり、教義に触れる機会が多かったからではなかったか。東三河では錫杖の頭に十字架を据えている地蔵がいくつかある。それは新城藩初代及び二代目藩主以外に設楽町豊邦、そして八名郡の共同墓地でも見ている。新城藩主初代及び二代目の菅沼定実と定易の菩提寺（新城市宗堅寺）で、二人の墓石代わりの地蔵の手に見ることができるとは興味深い。二人の茶の師匠、山田宗偏については、ここでは触れないが吉田（豊橋）を治めていた池田照（輝）政の茶の師匠でもあったという。池田輝政については豊橋の岩屋観音に対する信仰が厚かったことは拙論で触れたが、彼らとキリシタンの関係は今のところ判らない。地蔵の錫杖の十字架は図⑭A・Bの中津川の墓苑、豊橋の岩屋でも見れる。ただ岩屋観音

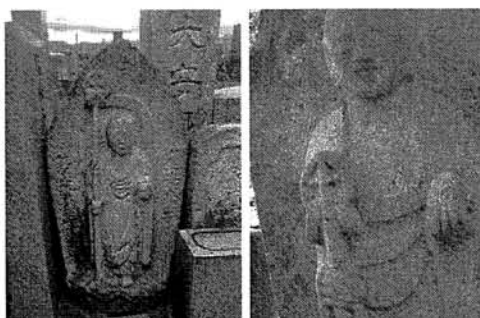


図=⑮宗堅寺・右が初代のもものが新城菅沼初代、左が二代目



図=⑭室生寺・奥の院錫杖の頭三角形は三位一体の象徴か

石の仏に見る隠された顔



図=16 A 中津川・南林寺脇墓園、左。図=16 B 豊橋岩屋観音（右）

だけではなく、各地の観音立像の天衣（羽衣）の造形が翼に見立てうることを改めて指摘しておきたい。このような天使の翼に擬した天衣は、岐阜県の御嵩地区の観音像のリボン、さらに蝶の羽のように見える衣文も羽に見立てられていると考える。それが図17 A Bである（前掲の拙論^③）。この他にも高遠の千手観音の手が翼に見立てうる（図18 A）。さらに、光背部が省略されることによって手が強調されている事例（図18 B）があるが、明治6年の（1873）

もあるが、この石造は明治37年に奉安されているが、明治6年の（1873）2月24日に、キリシタン禁制の高札が撤去され、すでに明治37年ではキリシタン禁制がなくなっていることから取り上げる要はないかも知れない。しかしこの石造がある名古屋の神蔵寺は、歴史的に文亀元年（1501）、足利九代將軍義尚（よしひさ）の家臣・柴田源六源勝重の開基という。この勝重は、柴田勝家の祖父（または曾祖父）と伝わ



図=17 A 設楽町大輪・右17 B・岐阜県御嵩・愚溪寺

るとされている。



図=18 A 高遠・建福寺。
18 B 右名古屋市名東区神蔵寺 三十三観音の一つ、明治期



るが、柴田家の墓石には「丸に十」④という家紋が彫られている。これは轡^{くわ}と説明されているが、轡は馬につながることから興味深い。この寺では宝暦九年（1759）に、大^{だい}店^{てん}鰲^{ぎょう}雪^{せつ}和尚が法地開山として招請されたが、この神蔵寺の本堂脇壇に安産守護の子安一夜地藏菩薩（筆者未見）を安置し、薬類を売り庶民の救済にあたったという。それはこの寺に、弘法大師作と伝わる薬師如来によ

今回、十字架と天衣、さらに千手観音の手を「見立て」という視点で考えてみた。とくに地藏が胸のまゝで宝珠を持つと、図11①、②のようにあたかも子供を抱いているように見ることが出来る。つまり子抱地藏に見立てられうるのである。地藏の形式は一定しないというが、宝珠を抱く地藏に赤子を抱くシメオンの姿を見立ててみたい。この種の地藏に地域的、年代的特性があると考えているが、別稿に譲る。図13③の石造に天明元（1821）年、もしくは文化六（1806）年と年号が判読できるのは稀である。文化六年の地藏は赤子を抱いているように見える。それは宝珠の大きさ、さらには全体のバランスによるのであろうが、宝珠を包む布が赤子をくるむ襁褓に見立てるための工夫の結果といえる。地藏の持つ宝珠を、純粹に宝珠と見るか、それとも赤子の頭と見立てるかは人によるかも知れない。石造の年代の特定は厳しい。

筆者は、まだ宝珠を子供に見立てうるような地蔵の分布にまで手がけていないが、この種の地蔵がかなり広範囲に存在している。さらに名古屋市内の墓地などでも多々見ることができ。もちろん、子供を抱く地蔵もあるが、「宝珠」を子供に見立てさせようとする背景には意図的な工夫があったと考えている。このことは子供を抱いた地蔵、あるいは

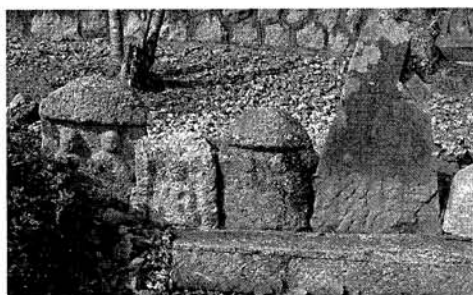
★石仏と地域の関わり

石の仏に見る隠された顔

由があるとすれば、馬と双体という点に特別なメッセージがあると考
える。ここには民俗的な関わり以上の意図があると考えたい。その特
殊な意識を探る手がかりが「馬」と見るならば、それは馬小屋のイエ
スにつながる。『仏教民俗辞典』によれば「馬頭観音」は次のように
説明されている。

とある。つまり、この記述から宗教的弾圧に苦しむ人々の苦悩と邪悪からの救済の願いにも重なるのである。馬頭観音の供養塔、あるいは石塔を建てるにしても経済的な理由から個人の力では厳しかったとする曽根原俊吉は、

「木喰僧と石像建立のかかり合いについて、当時の庶民の暮らしは幕藩体制にしばられて決して余裕のあるものではなかった。（中略）文字通り苦難と欠乏の生活が強いられていたといえる。」と論じている。西海賢二は、その曽根原を引用した上で「したがって信仰のためとはいえ、石像建立は重荷であつたに違いない」と断じながらも、「おびただしい数の石仏が造立されたのはなぜだろう



図=②①設楽町名倉・大蔵寺の双体仏三体、ひさがしがついている。両脇のものは30×18cm

蔵よりも馬頭観音との結びつきが多いとされるのだが、中山道、中馬街道などで「人と馬の結びつき」がどこまで説明理由になるかが判らない。ただ伊那谷では宣教師を招いたという京極マリアを意識しなくてはならない。幕藩体制の中で衆生の救済に専念するべき馬頭観音が、三面六臂で憤怒の形相(図②②)のものばかりではなく、柔和な表情で宝冠に馬頭を載せる(図②③)という単純化したものが多くなっていることを考えると、馬頭観音の信仰の背景に何らかの変化があったことをうかがわせる。三面六臂の憤怒相から柔和な観音という背景に民衆の抱く思想的な変化を検討すべきかも知れない。殊に頭に二頭の馬を載く馬頭観音、あるいは一石二体彫りの馬頭観音(図②④参照)、さらに頭に三頭の馬、あるいは一石三体彫りの馬頭観音の存在は、何を意味するか、



図=②②与良木峠(新城市)・三面六臂馬頭観音

か」と疑問を呈している。『仏教民俗学事典』に記されているような「死馬に供養塔を立て、馬頭観音を祀り、馬の安全と生育を祈った」とする記述は、社会経済的に説明が厳しくなる。一般的に馬頭観音は「人と馬の結びつきを象徴するもの」とされている。確かに尾張から伊奈谷にかけての、中山道、中馬街道、伊那街道では江戸時代初期から商業道路が網の目のように繋がり、農民が農閑期に自分の馬や牛で荷物を運ぶ賃稼ぎが行われていた。それ故に地

表象していると考えるのは、彼らの厳しい表情による。そして、このような一石双体の石造と異なる石造の存在する背景には、簡略化と見立てという手法があったから捉えたい。なぜならば人物を二体彫るよりも一体の方が手間が省け、馬を彫ることにより象徴的になる。つまり、馬に関わる人物をヨゼフとマリアに見立てる事が可能になる。この種の双体仏と子抱地藏がセットになると理想的である。そして、東栄町では古戸の双体仏、上栗代の双体馬頭、岡本の一石三体の馬頭観音、古戸の三体仏、そして古戸川合の受胎告知にと見立てることのできる双体像などが広範囲で見ることが出来る。また、長野県茅野市の惣持院には双体仏、三体仏があり、さらに四体仏、六地藏(瓦風に焼かれていた)があったが、石像はすべて風化しているので表情、年号な



図=②③串原村、寛政七(1796)年馬頭観音

その意味を問いたくなる。宝冠に二匹分の馬頭を載せたり、石に馬頭観音と言う字を彫り、その上に三匹の馬の頭(図②⑥)を彫ったものもある。このような一石双体(図②⑨A、B)の像がヨゼフとマリアを



図=②④伊那・東春近、馬頭観音文久元(1861)年



図=②⑤木曽福島馬頭観音



図=②⑥津具の馬頭観音

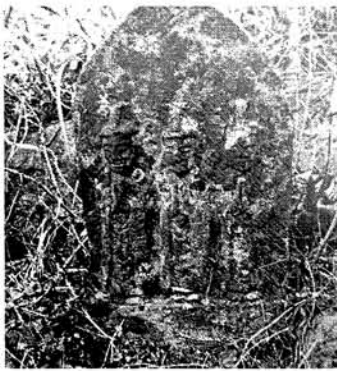
どは判らない。本来はどのようなにあったのかは、原状では不明である。また子抱地藏は見当たらなかったことは特記すべきであろう。

ところで三体仏をイエスの誕生を祝福するために来た東方の三賢人を見立てたものと考えたが、茅野市、伊那市高遠の例で見えるように三体仏、四体仏がある。三体仏、四体仏は茅野市の惣持院に見ることができ、この茅野市から杖突峠を南に越えた高遠の藤代では欠損はあるが四体仏を二例見ることができ。しかし、それが密教の四菩薩になるのかは判らない。キリスト教的にはイエス誕生時に天使の教えで駆けつけたのが羊飼であることを「ルカによる福音書」(2:8~13)のみで伝えているが羊飼いの人数は判らない。しかし東方の三賢人(マタイによる福音書2:1~12)と羊飼いを合わせると四になる。また仏教の四菩薩は胎藏界曼荼羅の中央部分「中台八葉院」の大日如来を中心に、東西南北に四仏を配することを考えると、実際は五体仏になる。さらにキリスト教では四は「神の均整を表す」とし、ユダヤ教としては「エデンの園に流れる四つの川を」、そしてこの川は「四つの福音を表す」と考えられている。つまり、石仏に見る三体仏、四体仏を仏教的視点でどこまで考えることができるかと言うことになる。

さて宝冠に馬頭二つを戴く観音像について話を戻す。この種の石造は愛知県北設楽から、長野県木曽福島、伊那方面でも広く見ることができ。図Ⅱ②④、②⑤の石造が、仏教的な双体仏、三尊仏とは異質だと考える。ここには仏教以外の救済思想を表現しようとする工夫、機知が秘められているのかも知れない。この工夫によって問題としていた道祖神(道祿神)と見立てられていた男女の姿の双体像の問題は解消できたといえる。そして、宝冠に馬頭を二つ戴く様式の馬頭観音と、一石二体の観音像をマリアとヨセフに見立てることが可能であれば、イエス誕生の物語を石仏群から読むことができることになる。ここに

石の仏に見る隠された顔

現世の苦しみからの救済を望む人々の姿を見ることが容易になる。このことは「寒念仏」や「月待」の問題が絡むと考えているが時間が無い。また、馬頭が三つ彫られた(図Ⅱ②⑥)のものや、東栄町の一石三体で彫られた馬頭観音(図Ⅱ②⑦)、さらに古戸普光寺の三体仏のように「三」という数の問題に行きつくことになる。この「三」を、三位一体につながると考えるか、どうかは今後の課題である。そのことは一石三体の馬頭観音を、東方の三賢人とする見立てが、是か否かを問いかけてくる。しかし、古戸の三体仏(図Ⅱ②⑧)の右端の人物の顔面に十字があり、この見立ての可能性を支持してくれると考えている。繰り返すことになるが古戸の三体仏が三尊仏ではないと見るのは、三体の大きさがほぼ同じ大きさで彫られているからである。中央の仏が大きく、両脇のものが小さければ三尊仏の形式なるのだが、三体とも均等に彫られている。しかしヨセフとマリアの石像とする双体仏は理解しにくいものである。だが、それが安曇野などの双体道祖神とは異なっていることは明白である。このような双体仏、子抱地藏そして三体仏を東栄町地内に見ることができわけだが、これら双体仏や、三体仏は福音書を参考にすれば理解できる側面がある。ただ、北設楽に見るような石造群を他の地区ではまだ見ていない。それは、この種の石仏



図=②⑦一石三体の馬頭観音・『東栄の石仏』より46×26cm



図=②⑧三体仏・東栄町古戸・右端の顔面に十字架35×43cm

石の仏に見る隠された顔

群が「カ所」に集中しない工夫がなされていたのかも知れない。このよ
うな地域的特性があるとすれば、それは自分たちの存在を隠そうとし
たからであろう。石造群をつなぐことによって物語性が紡ぎ出される
とするのは、筆者の読み込み過ぎかも知れないが、それら石仏群は巡
礼の聖地ではなかったかと考えるからである。黒木幹夫は巡礼とは
「日常と非日常」の中で「聖なるもの」との関わりである」と指摘す
る。そして、巡礼の歩く目的の一つは聖地に向かうものと、聖なる空
間における神話世界を巡るものがあるという。つまり、石造のあると
ころは聖地でもあり、神話的世界を構成していることになる。だから
どこにでも存在できるわけではない。黒木は聖地を巡る巡礼を直線的
な空間移動であると見なし、神話的な世界を巡ることを円環的な空間
移動と断じている。この考えを黒木は山折哲夫の『巡礼の構造』及び
『巡礼の思想』から援用している。この直線的な空間移動は世界の中心
に向っての往復運動になり、一神教にはふさわしい行動類型である
と黒木は見ている。東栄町本郷には大字桜平（上・下）がある。この
サクラという読み方がラテン語のサクラメント（キリストによって定
められた神の恩恵を信徒に与える儀式）、の場所を意味すると見る研
究者もいる。だが、桜平は東栄町本郷と布川にもある。布川の桜平は
かつて存在したという「林泉寺」という寺の跡地に近く、この跡地に
は「天」の字の彫られた円筒形の石が石祠の中にあった。（拙論：「石
の仏に見る隠された顔」愛知県東栄町の石造文化財を中心として―石
仏のイコノロジー③―
『東海学園言語・文学・
文化』第15号東海学園大
学日本文化学会2015）。こ
の布川の桜平の東端には
滝があり、花祭の滝払い
で用いられる水が汲まれ



図=29A古戸川合・
50×20cm・双体仏だ
が右の袖に注目・双
方女性か



図=29B拡大図・ともに女性のよ
うに長髪に見える。

るところでもある。ここには「あたご地蔵」と呼ばれる（貞享五
戊辰（1688）十一月十五日）銘を持つ地蔵があるが（『東栄の石仏』二五
頁参照）、この地蔵の錫杖に十字架があることは注目したい。

これら特殊な石造に特殊な意味を秘める土地が存するのは単なる偶然
なのかも知れないが、地名の問題や、石造の設置の背景に意図的なも
のがあったと考えたい。筆者は東栄町本郷の大字桜平から布川の桜平
を経由して、古戸そして古戸川合に進むことによって、神話の疑似体
験の世界を構成させていたと考えている。ヨゼフとマリアの存在、東
方の三賢人の出現（本郷岡本、ここは古戸及び布川から見ると東であ
る）を羊飼いに自身をなぞらえながら、布川で「天」と読める石（字
屋敷）を経由して、古戸で双体仏（ヨゼフとマリア）、三体仏（東方
の三賢人）に出会う道筋を歩んでいたのではなかったかと考えている。
ここには、神話的な時間と空間のズレが出てくるかも知れない。それ
が古戸川合にある受胎告知と考えられる石造の存在であり、さらに古
戸の南に位置する月の引田にあるシメオンに見立てうる子抱地蔵であ
る（図11③0）。この種の時間的なズレは、非日常的空間から見れば些
細なことかも知れない。しかし、このような石仏群から福音書に関わ
るような物語性が意識できる。北設案の双
体仏、三体仏の問題は、これまでのように
一カ所の石造群で完結させるべきではなく、
本来は数カ所の複数の石仏を関連させなが
ら見て行くべきものかも知れない。これは、
石仏群の新しい見方になるかも知れない。
なお月の清平寺の廃れた参道の脇に子安様
と呼ばれる子抱地蔵がある。

石造群をつなぐことで物語が見えるとい
うのは、筆者の視点である。しかし、思い

性を庶民生活の中に浸透させたと考えている。



図=③⑩月引田の子抱地蔵

込みかも知れない。だが、石造を全てが一カ所に纏められてしまえば疑われやすい。数カ所に散らばれば物語性を隠すこともできる。それは当然の知恵であろう。各地に祀られる馬頭観音も、その天衣の意匠から、天使に見立てられ日本的に受容されたのかも知れない。また社会経済的に中馬という馬匹輸送は「馬」と人の結びつきの中で宗教弾圧の影響を回避したばかりではなく、「馬」という象徴

子抱地蔵に話を戻す、地蔵の抱く子供が筆、あるいは男根に見える事例がある。つまり、意図的に子供らしく彫られていないのである。

あえて、子供ではなく筆のように細く彫られたり、男根状に見えるものもある。また子供も振り袖を着たおっぱいの姿のものもある。おっぱいの子供が、鞆を持ち女の子らしく彫られることは「マリアの七つの苦しみ」の一つ、「エジプトへの逃避行」を暗示しているのかも知れない。少なくとも男の子ではなく、女の子らしく彫られている幼子は、イエスの生命を狙うヘロデ王の話(馬)に通じる。この髪切り地蔵は、岐阜県美濃太田の佑泉寺、岡崎市の天恩寺、豊田市大沼の洞樹院(図=③②)

最近、筆者は、地域の石造の調査を纏めた『安城の石仏』(編者 永井眞一他 安城の歴史を学ぶ会 昭



図=③①子抱地蔵?・月 清平寺、手に数珠がある。

石の仏に見る隠された顔

和54年)を知った。そこでは、「髪切り地蔵」という名称は使われていなかった。だが、子育地蔵と分類されているなかに、「髪切り地蔵」と同様のものがあつた。しかし、抱かれている子供の持ち物、衣装についての記述はない。『安城の石仏』では、地域の石造文化財が網羅的に取り上げられ、庚申、観音、地蔵などの石造は420体を数え、地蔵は355体で83%になる(前掲書12頁)という。この『安城の石仏』で見る子育地蔵は、美濃太田、豊田市大沼、岡崎の天恩寺のような150×30センチを超える大型のものではなく、42×30、70×25センチと小型であり、地蔵盆などで地域との密着しているという。地蔵群は合掌地蔵39体(11%)、宝珠地蔵256体(72%)、錫杖宝珠地蔵45体(12%)、子育地蔵43体(12%)の四種に分類されているが、このことについては稿を改めたい。この地蔵群の中で、子育地蔵43体の内、鞆を持つのは、21体になる。これは、全体の地蔵の中で67%に過ぎないが、子育地蔵の中では43体中21体になりほぼ49%になる。これら地蔵の造立年代は、明治期のものが6体、大正期は1体、昭和が3体。残りの35体は年代不詳となっている。しかも、この25体は女の子に擬せられていることから、比率的に81%になる。これは、安城が東海道筋から約5キロほど南に離れ、矢作川に接し、三河湾に通じるという地理的特性に関連するものかも知れないが、子供を抱く地蔵の背景を考える手がかりでもある。このように幾多の石仏を繋げながら、民俗的背景などを意識してみると石仏には、これまでの見方では通じない世界が顕れてくる。殊に道禄神もしくは道祖神は再検討が必要になるかも知れない。それは、双体道祖神の多くが江戸時代中期以降のものと考えられていることにもよる。それはキリシタン弾圧が強化されていた時代とも重なるから



図=③②髪切り地蔵 豊田市大沼町・洞樹院

石の仏に見る隠された顔

である。

繰り返すが、ここで取り上げた双体仏は石祠の中にあたり、あったと考えられることから夫婦の位牌とする見方もある。このような双体仏は伊那地方から新城にかけては石祠の中に納められている例がある。しかし、空のものも多く、また石祠を失くしたものもある。特徴として北設案では、一石双体の石仏が多い。もちろんレリーフもあり、二体で納められているものもある。だが、名古屋などでは、ほぼ四角形の石にレリーフ状に彫られたものが多いのだが、これは使用目的とも関連し、さらに技術的な向上を意味するかも知れない。つまり時代的に遅くなると丸彫りの石造が多くなると考えている。だが、名古屋の四角形のレリーフ状のものは、上部に突起を有していることから壁などにはめ込むことが想定され、特殊な使用目的があったかも知れない。また図②④の大蔵寺のように庇を持つ構造のものもあるが、年代は特定できないが、様式から江戸初期のものと考えたい。

ところで東栄町古戸の普光寺や、隣の設楽町津具には貞享三(1686)年の記名の入った観音像の彫られた傘付墓石が、また元禄八(1693)年の地蔵の彫られた傘付墓石がある。つまり、貞享、元禄という江戸初期から中期にかけての辺りが、立派な石像を造れるほどの石工を呼ぶことができるほどの経済力があつたことになる。また、同時に津具、古戸ともに太平洋側と内陸部とを結ぶ要衝であつたことを意味している。伊那地方と北設楽郡内の人的交流については津具の金龍寺と駒ヶ根の蔵澤寺の住職が幼い丹瑞を金龍寺で得度させた事はすでに触れてある。なお、この石仏に記されている貞享、元禄期よりも五十年ほど前の寛永八年に吉田藩領(現在の豊橋界隈)でキリシタン久太夫が捕縛され、処刑されていたことが吉田藩主、松平忠利の日記(寛永八(1631)年十二月二十六日の条)に「火あぶりにいたし候」と記

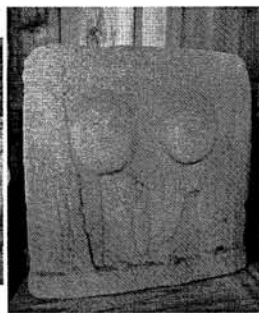
されている。この久太夫が吉田のどこで捕らえられたか判らない。しかし、吉田藩が東海道、別所街道、姫街道、天龍水系の他に三河湾から太平洋に及ぶ船運の要と見る考えると、久太夫が辿った経路が問題となる。気になることはレオン・パジェスの記述である。寛永八(1631)年の章の註四(88頁)に殉教者のことが記されているが、そこでは「吉田では一人」とあるだけで、久太夫であつたかは判らない。さらに彼らがこの地に上陸し、内陸部に入ろうとしたのか、それとも内陸部から海路を目指して吉田で捕縛されたのかは判らない。だが、この地方の隠れた道筋が見えることは確かだと言える。

★石仏の紡ぐ世界

ところで、道陸神(道祖神)とも呼ばれていた古戸の双体仏(図②B)が、卵塔場から消えた(平成三十年七月三十一日確認)。筆者が注目するのは、この石像が単なる道陸神、あるいは道祖神ではないと考えるからである。通常の道祖神像は男女の杯事など和合を予兆させる姿で彫られ、安曇野などでは男性は烏帽子を被り、女性は十二単風の着衣で彫られている。そのような石造は東栄町地内にもあるが、僧形のものとは一線を画すべきと考えている。通常の道祖神に比較して、この石像には和やかな表情は見えない。二体とも厳しい眼差しに見えるのも、異質である。特に男性が僧形であり、女性は子供を抱いているように見える。子供を伴った道祖神はない。同じ卵塔場で石祠に入って



図②④名古屋平和公園・大光院 A左35×29cm B右36×31cm上部に150mmの突起



図②③満光寺・新城市 30×30cm

いるもの(図Ⅱ19A)も風化が進み、本体部分の剥離が多く不明瞭だが、二体とも僧形である。新城市の満光寺にも僧形の双体仏は二組あるが、そこに子供の姿はない。

古戸の、厳めしい表情の双体仏は、他の双体仏、道祖神とは異なる。もちろん石工の違いがあるわけだが、表情が違うのは彫る人物の石造像に注ぐ意識の違いもある。それが「ルカの福音書」の理解に依るのかは不明であるが、生まれてきた「救世主」を待ち受ける「苦難」に共感しているのかも知れない。また、双体仏を位牌と見るにしても死ぬまで添い遂げるという婚姻様式が強く意識されるようになったのはキリスト教が関わってからである。またこの双体仏に対峙すべきシメオンが古戸では見当たらない。元々あったのか、なかったのかも分からないが、福音の話を知っているもの達に見立てを委ねているのかも知れない。つまり、見る側に双体仏を通してイエスを抱くシメオンを意識させる工夫がなされたと考えたい。このヨゼフとマリアに擬せられた双体仏が「馬」の頭を二つ戴く馬頭観音に変化し、さらに東方の三賢人が「馬」という象徴を戴く形に変化して行ったのは、より抽象的な方法を模索したからではなかったか。石造を一カ所に纏めなかったのは危険を回避するためであったであろう。

双体の石仏は、「馬」という象徴を観音の宝冠に戴く形でマリアとヨゼフに変化させた。つまり、質的変換がなされたことになる。それは、マリアとヨゼフの二人が↓↓↓双体仏↓↓↓双頭の馬頭観音へと変化することになる。このような「見立て」が可能ならば北設楽郡周辺は、キリシタンの集中していた場所になる。マリアとヨゼフの存在はイエスの誕生に関する物語を語り、それを補強するのが東方の三賢人に見立てられる三体仏である。だから三尊仏とは様式が異なるのである。このことは馬頭観音の三体像からも論じることができるが、ヨゼフとマリアを双体仏と見ることの是非が問われることになる。ここで、古戸川合の双体仏(図Ⅱ29AB)を考えてみたい。古戸から津具

石の仏に見る隠された顔

に向かう途中に川合の集落がある。この双体仏は、『東栄の石仏』では「道祖神とさいの神」の項目に入れられているが二人とも長髪であり、右側の人物の袖は「燕尾状」である。この天衣、あるいは衣の裾のことは、拙論で取り上げているが『史跡と文化遺産に富む島 壱岐』で論じられたエンゼルの翼型袖と見立てるならば、天使がマリアに「受胎告知」する場面と見ていくことを可能とする。ここから、馬頭観音や聖観音像に見る翻る天衣を翼の変形と見なせば天使像にもなる。

馬頭観音は、基本的に一石一体で彫られている。もちろん三面六臂のものも同じである。しかし双体、あるいは三体で掘られている事例は少ない。ここで取り上げた石造は例外的なものかも知れないが、例外的なものだからこそ、考慮する必要があると考えている。厳しいキリスト教の弾圧下で福音書がどのように伝えられたのかは分からない。しかし、見立てという手法によって、石仏に様々な工夫がなされていたことは見えて来たのではないだろうか。農民の生活に密接に関わっていた見られる「馬」を、キーワードと見なすことによって隠れキリシタンの様々な信仰の姿が顕れてくると考えている。

註

註①拙論「石仏幻想の道——三信遠にキリシタン文化を探して——」『言語・文学・文化』第13号(通巻72号)2013 東海学園大学日本文化学会

註②ルカによる福音書02:22~02:35参照。

ルカによる福音書については『現代聖書注解 ルカによる福音書』E.B.グラッドック 宮本あかり訳 日本キリスト教団出版局 2007

石の仏に見る隠された顔

(1971)、72～81頁。『キリスト教大事典』日本基督教協議会文書事業部キリスト教大事典編集委員会 教文館 昭和五十二年(昭和三十八年)、『新聖書大事典』馬場嘉一 キリスト新聞社 昭和五十二年(昭和四十六年)

註③ 服部幸雄「見立て考」『変化論—歌舞伎の精神史—』平凡社選書四一、1975 一八〇頁 鈴木廣之 「類似的発見—室町の〆擬〆、江戸の〆見立て〆—」『日本の美学』特集 見立て 八三頁

註④ 鈴木廣之 「類似的発見—室町の〆擬〆、江戸の〆見立て〆—」『日本の美学』特集 見立て 八四頁

註⑤ 中村幸彦 『中村幸彦著述集』第八巻 中央公論社、一九八二、第八章「戯作表現の特色(三)——趣向の形式——」一七九—一八〇頁。

註⑥ 鈴木廣之 「類似的発見—室町の〆擬〆、江戸の〆見立て〆—」『日本の美学』特集 見立て 八四頁

註⑦ 『設楽町誌——境域・文化編』北設楽郡設楽町 平成十六年312頁

ここでは、すでに廃却された寺院などを含め二十五ヶ寺の本末関係を記しているが、この寺院関係のネットワークは興味深い。これは藩を超えて、宗門関係あるいは、経済的利権と関わっていたことが想定できる。さらに、現存する田峰の日光寺、田内の幸秀寺、清崎の多宝寺、西路(田口)の福田寺は設楽町の宗門の身分、つまりキリシタン関係の問題を扱っていたことが知られている。このようなネットワークを通して日常的な塩、茶や干物などが信州方面に運ばれ、戻るときには煙草・酒・米・大豆・小豆・麻などが太平洋側に運ばれたとされている。

註⑧ 愛知県東納庫にある延命地藏は守谷貞治によって文政三(1820)年に彫られたとされ、県内には唯一ここにしかないという(説明文より)。

註⑨ 拙論「石仏幻想の路——三信遠にキリシタン文化を探して——」『言語・文学・文化』第13号(通巻72号) 東海学園大学 2013

註⑩ 「東海地方に見る隠れキリシタンの痕跡——翼を有する石仏達——石仏のイコノロジー⑧——」『東海仏教』第六十三輯(平成三十年) 東海印度学仏教学会

註⑪ 前掲書

註⑫ 『東栄の石仏』東栄町教育委員会 昭和五十四年 馬頭観音⑤

註⑬ 前掲書

註⑭ 『仏教民俗辞典』(仏教民俗学会編 新人物往来社 昭和六十一年)

註⑮ 『念仏行者と地域社会——民衆のなかの徳本上人——』西海賢二 大河書房2008 14頁

註⑯ 『東栄の石仏』前掲書 1頁「馬頭観音」の条

註⑰ 『イメーじ・シンボル辞典』山下圭一郎(訳者代表) 大修館 1988(第10版)

註⑱ 黒木幹夫「巡礼とは何か——カイラス巡礼と四国遍路——」『愛媛大学法文学部論集』人文科学編26 2009

註⑲ 『世界大百科事典』(平凡社)「巡礼」の項目、山折哲雄。「巡礼の思想」(弘文堂、1986) 山折の「巡礼の往復運動と円運動」及び山折哲雄の「巡礼の構造」(真野俊和編「講座日本の巡礼」第三巻「巡礼の構造と地方巡礼」雄山閣、1996)

註⑳ イエスの生命を狙うヘロデ王の話(マタイの福音書22:11—22:20)ここでは「マタイの福音書」にイエスとマリヤを連れてエジプトに逃れる」部分を引用しておく。イエスの生命を狙うヘロデ王の話がある(マタイ22:11—22:16)「ユダヤの王が生まれた聞いたヘロデ王がベツレヘム周辺の生まれて間もない幼子達を殺すが、ヨセフは夢で天使の話聞き、エジプトへの逃避行を決める。22:13占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」22:14ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジ

プトへ去り、03:15ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。03:16さて、ヘロデは占星術の学者たちになだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。03:17こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。03:18「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子供たちのことで泣き、慰めてもらおうともしない、子供たちがもういないから。」03:19ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、03:20言った。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」03:21そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。

註② 拙論 「石の仏に見る隠された顔——東栄町の石仏を中心として——石仏のイコノロジー——」『言語・文学・文化』第17号（通巻76号） 東海学園大学 2017

註③ 寛永八年に吉田藩領（現在の豊橋界限）（ママ）でキリシタン久太夫が捕縛され、処刑されていたことが吉田藩主、松平忠利の日記（寛永八（63）年十二月二十六日の条）に「火あぶりにいたし候」と記されている。『とよはしの歴史』豊橋市 平成8年 101頁

註④ レオン・パジェス『日本吉利支丹宗門史』（下）岩波文庫 によれば、

同じく尾張と名古屋に九人の殉教者があり、三會（ママ）には三人、タカヤマ、若しくは タカギ（○高木）には九人。駿河には五人、三河には五人、御油（ママ）に五人、吉田（○現今の豊橋）に二人、牛久保に一人、マルヤマ（○丸山）に一人、千々岩（ママ）に二人の殉教者があった。

石の仏に見る隠された顔

註④ 註②と同じ。

註⑤ 「東海地方に見る隠れキリシタンの痕跡——翼を有する石仏達

——石仏のイコノロジー⑧——」『東海仏教』第六十三輯（平成

三十年）東海印度学仏教学会

註⑥ 『第5回全国かくれ吉利支丹研究大会記念誌 史跡と文化遺産に

富む島 老岐』老岐島遺跡保存会研究会 平成五（1993）年改定

（初版平成四年） 八五頁